

令和4年度 豊岡市非認知能力向上事業検証会議概要

令和5年3月20日

○児童生徒の非認知能力の調査、分析は、青山学院大学社会情報学部 学習コミュニティデザイン研究所が行う。(苅宿俊文教授、吉田葵助教 望月玲奈特別研究員他)

1 効果測定分析結果【小学校1年生「演劇ワークショップ」】

(1) 調査対象

市内全小学校1年生（有効回答数 543）

(2) 調査方法

- 演劇ワークショップの前後に、「授業中の様子」に関する質問紙を実施
- 3つの調査項目「やりぬく力（自己効力感）」「自制心」「協働性」について、演劇ワークショップ前後の変容をみる。

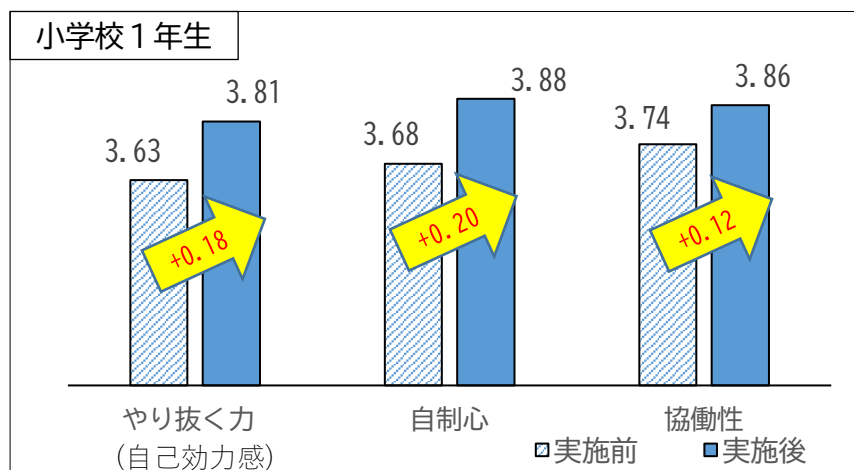
※小学校1年生対象の調査では4件法を用いる

⇒回答に対して、以下のように点数化する。3項目15の質問から各質問と項目ごとの基本統計量を算出し、事前事後の結果の差異を比較する。平均値に差があるかどうかを確認する際には、等分散性を確認したのち、t検定を行い、有意かどうかを確認。また、クロンバックの α 係数を用いこの調査は内的整合性があり、信頼性が高いとしている。

4点 とても思う	3点 思う	2点 あまり思わない	1点 思わない	欠損値 わからない
-------------	----------	---------------	------------	--------------

(3) 調査結果

- 3つの調査項目の平均値の変化[事前・事後]



■ 調査結果まとめ

- ☆ 「やりぬく力（自己効力感）」「自制心」「協働性」のすべての項目において、プラスの変化があった。
- ☆ 能動性のある演劇ワークショップを実施することが、非認知能力の向上につながる事がわかった。
- ☆ 通常の授業中での非認知能力が高い児童ほど、演劇ワークショップでの非認知能力も高い傾向にある。

2 効果測定分析結果【小学校6年生・中学校1年生「コミュニケーション教育の授業」】

(1) 調査対象

市内小学校6年生、中学校1年生（有効回答数 221）※調査は抽出校（小7校、中3校）

(2) 調査方法

- 演劇ワークショップの前後に、「授業中の様子」に関する質問紙を実施
- 3つの調査項目「協働性」「自己効力感」「メタ認知」について、演劇ワークショップ前後で変容をみる。

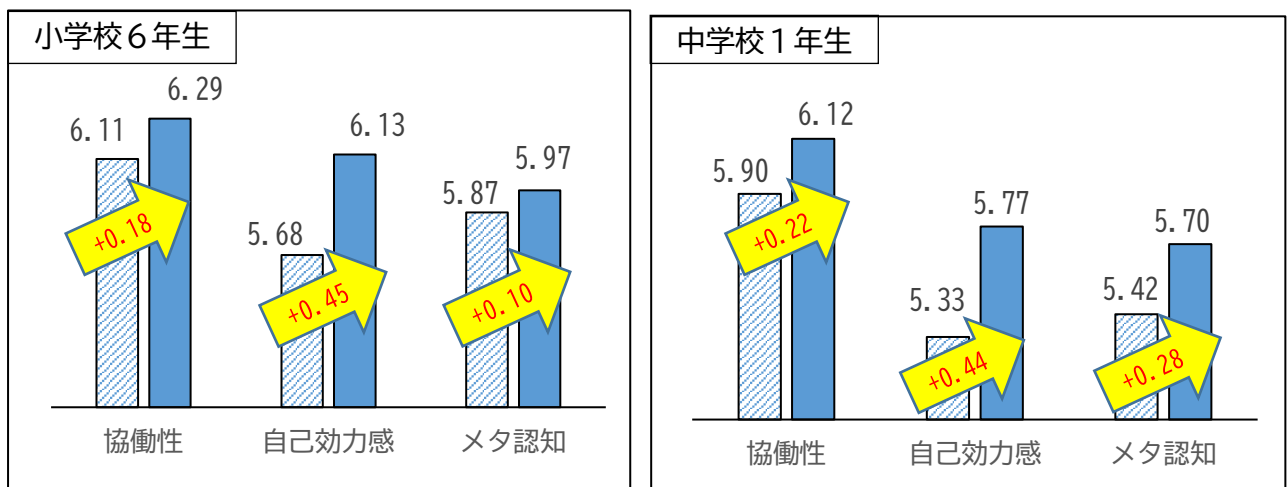
※小学校6年生及び中学校1年生対象の調査では7件法を用いる

⇒回答に対して、以下のように点数化する。3項目27の質問から各質問と項目ごとの基本統計量を算出し、事前事後の結果の差異を比較する。平均値に差があるかどうかを確認する際には、等分散性を確認したのち、t検定を行い、有意かどうかを確認。また、クロンバックの α 係数を用いこの調査は内的整合性があり、信頼性が高いとしている。

7点 とても思う	6点 思う	5点 少し思う	4点 どちらでもない	3点 あまり思わない	2点 思わない	1点 全く思わない
-------------	----------	------------	---------------	---------------	------------	--------------

(3) 調査結果

- 3つの調査項目の平均値の変化[事前・事後]



- 調査結果まとめ

小学校6年生

☆ 「協働性」「自己効力感」において、事後の方が有意に高かった。特に「自己効力感」のプラスの変化が他の2項目に比べて大きかった。

☆ 「メタ認知」においては、有意さはないものの事後の方が高かった。

☆ 事前/事後の関係は、どの項目においても非常に強い正の相関があった。

中学校1年生

☆ 「協働性」「自己効力感」「メタ認知」のすべての項目において、プラスの変化があり、有意に高かった。

☆ 事前/事後の関係は、「協働性」と「メタ認知」においては、非常に強い相関関係があり、「自己効力感」においても強い正の相関があった。

3 主な意見

[青山学院大学 苅宿教授]

- 「協働性」に関しては低学年も小 6・中 1 も高止まり。学級経営が非常に反映していて、力を合わせることにについては習熟している。「自己効力感」に関しては、自分がアクティブなことをすると、周りが認めてくれるということが自己効力感を向上させる。このことから教科教育の中ではチャンスのない子どもがワークショップをする大きな意味がある。
- 指示をする、それに従って動くのではなく、自分で決めて、進んで動くという能動性がワークショップの台本にも色濃く出て、ファシリテートされている。教科教育は、正しい答えをわからなければいけないし、学習目標が細かく定められている。これは必要なこと。生きる力にどうつなげるのか、教科教育にどう生かしていくのかが大切。データ、質問を現場の先生に見てもらい、変化の大きいところ、伸びているところを見てもらう。自分で考えて動く、能動性があることにワークショップの意味があり、教科教育でもアクティブラーニングをやっていくうえで生かせる。

[ファシリテーター わたなべ]

- ワークショップでは、「こうしなさい」とは言わないが、「こうした方がいいよ」「こういう考え方もあるよ」「こういうこともできるかもね」と声をかける場面は多い。子どもたちを見ていると、それが自分たちにあっているか、面白いかどうか、やってプラスなのかを色々と考えている。
- ワークショップの活動をどう教科教育に生かせるのかを強く思う。今年、ワークショップ後にファシリテーターのかかわり方を解説する時間をとってもらい、大分理解が進んだと思う。この活動がイベントで終わるのでなく、学校生活にどう取り入れるのかという点で、担任によって認識の差があるということはこれからのポイントだと考えている。休み時間や放課後で遊びの一つとして子どもたちにできることを根付かせていくことから始める。次年度は先生方にどう提案してくかが自分の課題と考えている。

[嶋教育長]

- 演劇ワークショップが教科や特別活動などの教育にどのような効果や影響をもたらすかの視点を持たなければならない。もともと、このワークショップは、貧困対策としてスタートした。貧困という社会的背景を抱えた子どもたちが非認知能力を高め、生きる力を習得することで貧困の連鎖を断ち切ることができるのではないかとということである。そういう観点でいうと、例えば、教員から見ると集団の適応力が低いとか、協働性や自制心が低いと感じる子どもたちが、どう変わっていくのか。ワークショップによって変容することもしないこともあるだろうが、質問項目に対して気になる子どもたちが、どう回答しているのかを的確にとらえ、変容や効果が感じられることを教科指導や学校行事、遊びの場で生かしていく。そうすることで、すべての子どもたちが、将来社会に出て生き抜いていく力を身につけていくのではないかと。教員にとっても、しんどい思いをしている子どもたちにワークショップで得た働きかけをしたらこんなに変わったという経験があれば、自信につながることになるのではないかと。